

シリーズ
原発・いのち・みらい
その29

日本科学者会議
第三十五回原子力発電問題全国シンポジウム

福島原発事故から三年半
事故の現状と再稼働の動き、活断層問題

理事 齊藤 典才 (金沢市・外科)

八月三十日(土)、三十一日(日)、日本科学者会議主催の第三十五回原子力発電問題全国シンポジウム「福島原発事故から三年半」が、金沢市駅西健康ホールで開催されました。初日に参加したので報告します。

福島大学特任教授の清水修二氏(専門は財政学、県民健康調査検討会の委員)は、「三年半を経過した福島原発の現状と再稼働の動き、活断層問題」が金沢市駅西健康ホールで開催されました。冒頭、清水氏は、チェルノブイリ原発事故は炉心ごと爆発したのに対し、福島原発事故は水素爆発により建屋が吹っ飛んだものの、放出された放射性物質の量が格段に異なり、ヨウ素一三一は十分の一、セシウム一三七は五分の一程度であり、なおかつその大半が海洋に降下したことをか

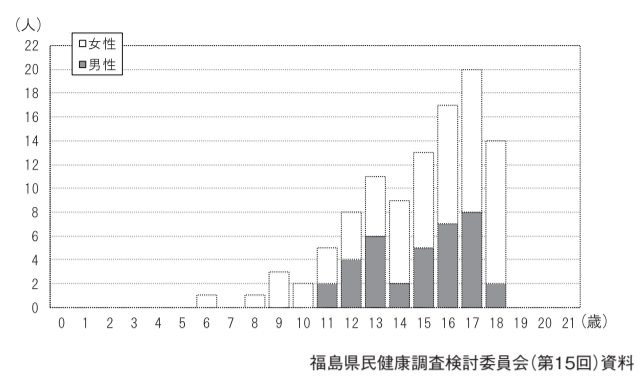


図1 甲状腺ガンおよびその疑いあり患者数の年齢・性別分布 (清水氏の資料から引用)

た放射線物質の量が格段に異なり、ヨウ素一三一は十分の一、セシウム一三七は五分の一程度であり、なおかつその大半が海洋に降下したことをか

ら、チェルノブイリ事故のような健康被害が起こると考えにくいことを強調されました。また、今、福島で生活している住民の放射線被ばくについては、外部被ばくと内部被ばくの二つのデータを紹介されました。外部被ばくについては、生活協同組合グループが全国十二の単一組合の組合員について七日間の外部被ばくの実効線量を測定した結果、自然放射線の影響を取り除いた福島県での年間放射線被ばく量は〇・六ミリシーベルトであり、それほど問題とはならないこと、内部被ばくに関しては、生活協同組合が行った陰性調査結果では、福島県内の家庭の食事から放射線は検出されるものの、大半がカリウム四〇で、セシウムはほぼ検出限界未満であり、内部被ばくも無視していいレベルと報告されました。



清水修二氏 (福島大学特任教授)



野口邦和氏 (日本大学歯学部RI共同利用施設)

また、二十万人の子どもの甲状腺がん検査についても言及され、通常では百万人に一人、二人といわれる子どもの甲状腺がんが、今回九十人が「がんまたはその疑いあり」で、これは予想外の結果だったそうです(図1)。しかし、重要なことは百万人に一人、二人と言われるのは罹患率(一年間にどれくらい患者が出現するか)であり、今回の数字が示しているのは有病率(ある時点でどれだけ患者が存在するか)であること、この両者を比較することは意味がない。そこで、注目すべきはチェルノブイリと福島の子どもの甲状腺がんの年齢分布であり、福島では十歳以上に多く分布しているが、チェルノブイリでは〇〜四歳が圧倒的に多く、九歳までで九八パーセント弱であり(図2)、福島で多発する子どもの甲状腺がんは、チェルノブイリとは異なる理由として、①福島原発事故によるヨウ素一三一大気放出量はチェルノブイリ原発事故の十分の一以下である②大気中に放出された放射性セシウムやヨウ素は、七〜八割が海洋中に降下した③甲状腺スクリーニング検査(いわき市、川俣町、飯館村の〇〜十五歳の

Age distribution of children with thyroid cancer in 1986-1995 (age at the time of the accident)

Region	Total population, thousands	Number of thyroid cancer children	Number of cancer by age			
			0-4	5-9	10-14	%
Brest region	1,520	97	68	27	2	
Vitebsk region	1,300	7	4	3	0	
Gomel region	1,670	225	149	72	4	
Grodno region	1,160	24	12	11	1	
Minsk region	1,410	20	14	5	1	
Mogilev region	1,270	21	14	6	1	
Minsk city	1,630	26	17	8	1	
Belarus	9,960	420	278	132	10	
%		100	66.2	31.4	2.4	

Present Status of Childhood Thyroid Carcinoma in Belarus following the Chernobyl Accident
Akira SUGENOYA, Yuri E. DEMIDCHIK, Evgeny P. DEMIDCHIK

図2 ベラルーシにおける甲状腺がん患者の年齢分布 (清水氏の資料から引用)

小児(千八百人分)およびWBC(ホールボディーカー)の測定で得られる放射性セシウムによる預託実効線量分布(双葉町、大熊町、富岡町、楢葉町、広野町、浪江町、飯館村、川俣町、川内村の成人三千二百二十八人分)から、福島県民の甲状腺線量は中央値として十ミリシーベルト未満、相対的に高い地域でも九〇パーセントは三十ミリシーベルトである④こうした甲状腺線量の評価値は、弘前大学の床次真司教授グループの独立した評価値と一致(チェルノブイリ原発周辺地域の小児の甲状腺線量は、中央値が

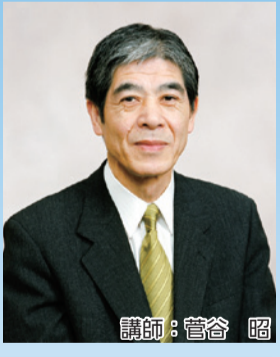
福島最大の十倍以上、その最大値は福島最大の三倍以上である)⑤食料中の放射性ヨウ素の暫定規制値は牛乳・乳製品では三百ベクレル/kgと、チェルノブイリ原発事故時に旧ソ連が設定した基準値の十倍に達している。福島県民の甲状腺線量は中央値として十ミリシーベルト未満、相対的に高い地域でも九〇パーセントは三十ミリシーベルトである④こうした甲状腺線量の評価値は、弘前大学の床次真司教授グループの独立した評価値と一致(チェルノブイリ原発周辺地域の小児の甲状腺線量は、中央値が

第9回 原発・いのち・みらいシリーズ講演会

テーマ

チェルノブイリ事故の医療支援の経験から福島を考える

講師 菅谷 昭氏 (松本市長、医師)



とき ■ 2014年10月26日(日) 午前10時~12時
 ところ ■ 金沢都ホテル 7階 鳳凰・飛翔の間 (定員400人)
 参加費 ■ 無 料(どなたでも参加できます。)
 申込み ■ 同封の案内チラシ裏面を参照の上、10/17(金)までに保険医協会へ
 後援 ■ 石川県医師会
 ※託児あり 10/17(金)までにお申し込みください。